

言語文化学科における教員養成に対する理念等

教員養成に対する理念・構想・養成する教員像

【言語文化学科】

言語文化学科の教員養成に対する理念は、複言語・複文化能力を有した英語教員を育成することである。すなわち、高い英語運用能力を有し、英語圏文化に精通していることはもちろん、高度な母語運用能力と母文化の理解、更には第三の言語・文化に関しても深い理解を有した英語教員を育成することを目的としている。

言語文化学科は、言語・文化の多様性と普遍性の理解を深めることをその学びの中心としている。言語文化学科には複言語・複文化専攻と英米学専攻の2つの専攻があり、前者は言語学専攻と異文化コミュニケーション専攻、後者は英語学・英語教育専攻と英語圏文学・文化専攻に分かれている。前者では、言語・文化の多様性と普遍性について世界の様々な言語・文化の観点から学ぶ。後者では、英語という個別言語・文化に特化し、リンガ・フランカとしての英語のあり方を前提として、言語と文化の体系的理解を深め、「英語」の専門家になるために必要な能力を身につける。言語文化学科の教員養成課程においては、これらの専攻の科目を万遍なく履修することを課している。その背景にある理念は前段に述べた学科の教員養成に対する理念「複言語・複文化能力を有した英語教員を育成する」にある。現代の日本における教育の場においては、英語学習者が日本人とは限らず英語母語話者であることもあれば、非日本語・非英語母語話者であることもある。そのような教育環境において、現代の英語教育者には、単に英語という言語や英語圏文化を教えらるということだけでなく、言語・文化の普遍的性質を知り、学習者の母語・母文化が如何なる言語・文化であっても、柔軟に対応出来る力を備えていることが求められる。本学科は、中等教育におけるそのような教員の育成に寄与することを目指している。

言語文化学科の教員養成に対する構想は次のとおりである。

ア. 構想の概要

本学科の教員養成課程においては、前節で述べた理念に基づき、中等教育段階にある生徒のあらゆる要求に対応し、普遍性と応用性のある能力を身につけた国際人を育成することができる教員を養成することを目指している。そのため、教員養成課程にある学生には多彩な科目の中から万遍なく履修することを課すと共に、履修に際しては、科目群の中から個々が必要とする科目を自ら選ばせることによって、主体的に学び、自律的に行動する姿勢を身につけさせている。これにより、単に知識を教授するだけでなく、生徒に対する責任を常に自覚し、自己開発を継続し、「生きる力」を身をもって教えられるような教員を養成することを目指す。

具体的には、複言語・複文化能力を有し、言葉と文化に対する体系的かつ深い理解を背景とする確固たる英語運用能力及び英語圏文化理解力を基盤とし、英語教育に関する専門的知識を習得した上で、それらを教育現場での実践に活かすことができる教員を養成したい。そのため、英語運用に関わる科目を重厚に配置する他、学士課程に英語圏留学を必修科目として配置し、実践経験を多く積ませるよう配慮している。また、教職科目の多く

が、学士課程の必修科目や選択必修科目となっており、教職課程に学ぶ意義と学士課程に学ぶ意義の平行性が理解できるような課程になっている。つまり、本学科の設立の理念の射程に教員養成が当然のこととして含まれることを学生は十分理解できるようになっている。

イ. 構想とカリキュラムの関係

上記の構想は様式2号に反映されている。各科目区分からの取得要件単位数は、英語学10、英語文学6、英語コミュニケーション10、異文化理解6と総32単位を修得し、法令に定める基準を満たしているのは当然だが、4専修を専攻していくにあたり、前述のとおりそれぞれの専修で学ぶ内容、身につけるべき能力を育成する各科目配置によって、卒業するまでにさらに単位を修得することになる。言語学専修と英語学・英語教育専修は英語学を22単位まで、異文化コミュニケーション専修は異文化理解を22単位まで、英語圏文学・文化専修は英語文学を22単位まで最低でも修得する。したがって総44～48単位まで修得することとなる。また、これに加えてさらに自由に科目を選択し修得することができるため、各科目群に重厚に配置した教員養成に関わる科目を研鑽して学ぶことができる。これは本学科の教員養成に対する理念を具現化するにふさわしいカリキュラムといえる。なお、学科の固有科目の大半が教職科目に指定されている科目であり、学士課程修了の先に教員免許取得を見据えることができるようになっている。これは本学科設立の理念を考慮すれば当然のことである。

各科目区分においては、各専攻の特徴を活かし、該当する学問領域について体系的知識を習得できるとともに、それを教育現場で応用することまで射程に入れた科目が配置されている。英語学においては、包括科目として、英語という個別言語から言語の仕組みを考える科目と人間言語の仕組みから英語という個別言語を考える科目を、その上に言語の文構造・音の仕組み・歴史などの学問体系をより深く理解する科目を、選択科目として、より学問を追究できる科目や実用英語の運用法を学べる実践系科目などを用意している。英語文学においては、包括科目として、英語圏の文学文化研究の基礎を学べる科目を、その上に英米に特化したイギリス文学・文化とアメリカ文学・文化を専門的に学べる科目に加え、英米に特化しない英語圏の世界文学・文化を学ぶ科目を、選択科目として、より学問を追究できる科目や英語を職業とするために必要な知識・技能を教授する職業系科目などを用意している。英語コミュニケーションにおいては、4技能をバランスよく学べるよう科目が配置されている。それらの科目の多くが英語による授業であり、学生は日本語に頼ることなく、授業内容以外の場面でも英語を駆使して目的を果たさなければならない。真の応用力、汎用性のある英語運用能力を身につけさせることができると考える。異文化理解においては、言語・文化を学ぶ意義や複言語・複文化主義の理念のもと、英語圏の文化理解に留まらず、世界の様々な文化圏について言語と文化、宗教と文化、メディアと文化という観点から学ぶ科目を用意している。

ウ. カリキュラム運営体制

中京大学においては、大半の学科が教職課程を有しており、それらを統括する組織とし

て、各教職課程の代表者で構成される全学レベルの「教職センター委員会」を組織している。同委員会においては規程を整備すると共に、定期・不定期に委員会を開催することによって、各教職課程が妥当な運営を行っているか、大学としての教員養成の理念や、社会的責任に照らして監視している。また、各課程が設置されている学部においても、教職センター委員を中心に、課程運営の改善を随時行うと共に、それらを全て教授会に報告することによって学科全体が教員養成に関与する体制を整えている。また教職センター委員は各教職科目での指導内容について把握し、それらが課程設置の趣旨に照らして適切かどうか監視し、必要に応じて科目担当者と意見交換を行っている。

認定を受けようとする課程の設置趣旨（学科等ごと）

【言語文化学科】

国際学部は、国際英語学部と国際教養学部を改組し、設置する学部である。これに伴い上述の通り、言語文化学科には、複言語・複文化学専攻と英米学専攻の2つの専攻が設置され、前者には言語学専修と異文化コミュニケーション専修が、後者には英語学・英語教育専修と英語圏文学・文化専修が設置される。これらの専修は教職課程の設置に必要な科目群とも概ね一致しており、各専攻の専門領域を万遍なく履修することで、複言語・複文化能力を有した英語教員を育成できるように構成している。各科目群のバランス、科目群の中での履修について十分配慮し、より幅広く、そして関心ある学生により深く学修させられるような課程を実現した。本学科の前身に当たる国際英語学部の教職課程の歴史は長く、多くの英語教育関係者を輩出し、地域からも一定の評価を得ているが、時代の要請に即応した新しい学士課程、そして教職課程が、これまで以上に社会の信頼を得ることができると考える。また、本学科は単に従来の「英文科」の延長上にあるものではなく、複言語・複文化主義に立った国際人の育成を目標としており、時代の変化に柔軟に対応できる真に国際性ある教員を輩出することによって、教育界に対し、これまでにない有為な人材を提供できるものとする。

《中学校教諭一種免許状：英語の設置趣旨》

本学科においては、4技能を高める科目を豊富に提供しており、一年秋学期にセメスター留学を必修化するなど、積極的にコミュニケーションを図る姿勢を身につけさせている。また、複言語・複文化主義の理念に従い、あらゆる言語や文化を偏向なく受容する姿勢を身につけさせている。これらは、中学校新学習指導要領外国語科の目標として「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築する」という「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」育成と合致するものである。さらに、教授言語を英語のみにした授業を多く取り入れることによって、4技能を高度に駆使してコミュニケーションを図ることを実践させるが、これは『「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」及び「書くこと」の技能を総合的に育成』することを重視している中学校指導要領の英語における目標と合致するものである。

上記等に鑑み、本学科の教育課程の延長上に中学校教諭が見据えられるのは自然の成り行きでもあり、とりわけ学習指導要領が目標とする教育の達成に本学科の卒業生が寄与できるものとする。

《高等学校教諭一種免許状：英語の設置趣旨》

高等学校新学習指導要領は、外国語科の目標を「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を育成するとしている。本学科の教育課程においては 4 技能の向上やコミュニケーション能力の向上は無論のこと、言語やコミュニケーションに対する体系的理解を促進する科目を多数用意している。これらは教壇における説明力に繋がるものであり、生徒の「的確な理解」や「適切に伝える」能力、引いては「統合的な言語運用」の育成に大いに寄与するものとする。また、中学校から引き続き掲げられた「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」育成についても、複言語・複文化主義の理念に従い、あらゆる言語や文化を偏向なく受容する姿勢を身につけさせる学びが合致している。言語文化学科での学びを通じて言語文化全般に対する学問的理解を発揮し、高校生に相応しい理解を促進する授業を展開できるものと考えられる。

上記等に鑑み、本学科の卒業生が高校教育界に貢献できる可能性は十分であり、本学科に高等学校教諭一種免許状の取得課程を設置することは、本学科の社会に対する貢献の重要な柱であると考えられる。